

「万国の津梁」沖縄をめざして

# 研究会通信

第2号／2016年2月15日  
「沖縄・国際物流拠点形成研究会」  
(再開港湾研究会)

連絡先／民主党沖縄県連 〒900-0022  
那覇市樋川 1-6-12 電話 098-996-5115

## 本部港と「やんばる」を現地視察 ―第2回研究会(2月8日)

□ここしかない生物が多い、なぜ?  
―環境省やんばる野生保護センター・  
「ウフギー自然館」で説明を聞く

視察はまず、やんばるの自然保護に当たる環境省「やんばる野生保護センター」の「ウフギー自然館」(国頭村比地)を訪問(ウフギーとは大木のこと)。

同館の木村麻里子・上席自然保護官は「やんばるの地名は地図にはなく、沖縄本島北部の東村、大宜味村、国頭村の3村を指して“やんばる”と呼んでいる。本島北端には年間50万人の観光客が訪れる」と、さっそく説明。



木村麻里子・上席自然保護官(左手前)からやんばるの自然の説明を聞いた。

ヤンバルクイナやノグチゲラ、ケナガネズミなど、日本全国の0.1%ほどの面積の「やんばる」には「ここしかない生物が多く、日本全国で確認されている鳥の半数、カエルでは4分の1ほどの種類がいる」。

「それはこの地域の成り立ちに関係する。今から1千万年ほど前の地殻変動で、島に残された生物が独自に進化」。「奄美・琉球のくくりで世界自然遺産登録をめざすが、奄美と沖縄は百万年前までは同じ島だった」。

## ◇ヤンバルクイナ観察民間人ガイドも

国の天然記念物の「ヤンバルクイナ」が「発見」されたのは30年ほど前。「ただ地元では“アガチャー”(あわてんぼーという意)の名で知られていた。生息数は現在、1500羽ほど確認されている。もとはまだ多かったのだが、マングースにやられるなどして減った」。ヤンバルクイナの観察をガイドする民間人も活躍

しているとのこと。

## ◇やんばるの森が県民の水をつくる



国頭村には生きたヤンバルクイナ(写真)を展示している施設(世界唯一のヤンバルクイナの観察施設)もありますが、今回は都合で

視察を断念。

やんばるにはこのほか、ノグチゲラやヤンバルセナガコカゲ、ナミエガエルなど、ほかにもたくさん珍しい生物が生息しています。

「やんばる3村内に6つのダムがあり、やんばるの水は名護や那覇などに送られている」。やんばるの森が水をつくっていることも忘れてなりません。

## □東村(伊集盛久村長)を訪問

―国立公園化に関係3村は同意  
環境省の世界遺産への取組みを評価

環境省の「やんばる」の国立公園化・世界自然遺産登録の取組みに連動して、本島北部の地元の東村、大宜味村、国頭村の関係3村も動きが活発になっています。

訪問した東村では、伊集盛久(いじゅ・せいきゅう)村長(下の写真正面)や同村企画観光課の金城幸人課長と意見交換しました。



伊集村長は「民主党県連を中心にした研究会の訪問に感謝」と挨拶。「やんばるの国立公園化には3村とも同意」し、「やんばるを、2018年度をメドに世界遺産に登録したいとの環境省の取組みを承知している」と述べ、国立公園・世界遺産の意義や実現までのスケジュールについて村民や議会、6つの集落、農業委員会などに「理解を求める活動に取り組んでいる」と強調しました。(→2面に続く)

また、隣の国頭村とともに国有林、福地ダムの国立公園の地域指定を協議しているが、「民有地が少ないので規制への住民の異論はない」「グリーンツーリズムなどの体験型観光、農業と観光を結び付けた活動を通して国立公園・世界遺産登録への住民の理解は進んでいる」とのこと。

さらに「指定に向けて3村は情報を共有し、「県内最大の福地ダムに隣接している森林部分の多くが国立公園、世界遺産の地域に指定されているので、ダムツーリズム、エコツーリズムの企画調査にも乗り出している」と精力的な取り組みが続いています。

### ◇本部港とのリンクも議論

「整備が進む本部港を活かして、やんばるとリンクして一帯を国際観光地に」との研究會メンバーの問題提起に、「外国観光客にいかにか東村まで足を運んでもらうのが課題。3村の連携を重視し、本島北部東側の大浦湾の地域とも連携を強めているが、外国観光客への対応策づくりはこれから」（金城課長）。

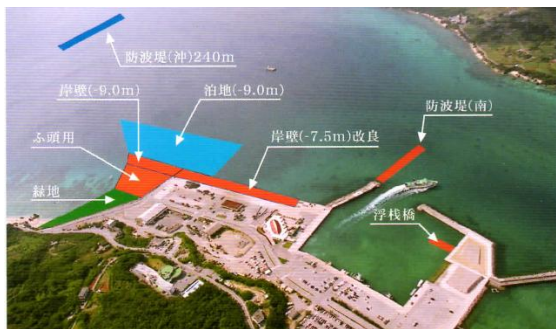
伊集村長も「本部港に入る旅客船の滞在時間が6時間から7時間。その時間を利用し、東村まで観光に来てもらうようにできないか。港が整備され、外国観光客が増えた場合はこれから検討」との意欲を示しました。

このほか国立公園化・世界自然遺産登録が実現した場合の「ルールづくり」や自然を活かしたあらたな事業の展開などについて意見交換しました。

### □本部港、港湾の改修進む

一岸壁は水深9mに 大型旅客船の寄港も可

続いて沖縄本島北部の拠点港、本部（もとぶ）港の視察では、沖縄県土木建築部港湾課計画調査班の高良亨・主任技師が同港の整備状況を説明（下の写真参照）。



青色の部分が泊地（水深9m）、赤色の部分が岸壁の改良（水深9m、7.5m、耐震化など）

本部港は、沖縄本島北部圏域の人・ものの拠点の役割を担い、石炭運搬船の利用や鹿児島航および伊江航路のフェリーが就航し、大型クルーズ船も寄港しています。

現在、防波堤で囲まれた船だまりは、フェリーや小型船が使用し、その外側の岸壁を大型クルーズ船が使用しています。

しかし、これまで風波に煽られて貨物船が外側の岸壁に衝突したり、高波が岸壁に押し寄せるなどの事故や災害があり、そのため、岸壁の増強や整備（耐震化をはじめ岸壁の水深9m、7.5mの改良）、港湾施設用地の造成、臨海道路の建設などのほか、台風時や冬場の風浪時の越波対策として沖合の防波堤の造成が喫緊の課題となっていました。



県港湾課の高良亨主任技師（左側）の説明に聞き入る視察メンバー

高良主任技師の説明では、「岸壁改良や港湾施設などの港湾改修のための通常事業が平成28年度で終わり、クルーズ船の寄港が可能になる」とし、また、「風波よけの沖合の防波堤（長さ240m）の事業に着手し、平成28年度末までに完了する予定」とのことです。

岸壁から周辺を見渡すと、荷さばき施設用地や港湾施設用地の造成も進み、冷凍冷蔵施設のほか民間倉庫もできつつあります。ただ、上屋の施設の早急な建設、岸壁のさらなる拡張などの整備が課題ではないか、というのが率直な感想でした。

### ☆ LRT（次世代型路面電車）の導入構想

視察の車中で、沖縄の中南部でのLRT（次世代型路面電車）の導入構想も披露され、LRT導入計画が進んでいる栃木県宇都宮市と芳賀（はが）郡芳賀町を近く視察することです。沖縄の交通体系の形成に期待。

### 事務局だより

翌9日は民主党県連の比嘉稔顧問（花城正樹代表の代理）のほかで、海運や物流、製造会社などを訪問し、「港湾研究会」の「再開」を報告し、今後の協力を要請。各企業・団体から「那覇港の整備を急いで」「研究会の成果に期待」と大いに励まされました。◆◆◆◆